

夢よりもはかなき世の中を

読外方注意 注意

夢よりもはかなき世の中を、嘆きわびつつ明かし暮らすほどに、四月十

日もなりぬれば、木の下暗がりもてゆく。築地の上の草青やかなるも、人

はことに目もとどめぬ。あはれとながむるほどに、近き透垣のもとに人の

けはひすれば、誰ならむと思ふほどに、故宮に候ひ小舎人童なりけり。

あはれにもののおぼゆるほどに來たれば、「などが久しく見えざりつる。

遠ざかる昔の名残にも思ふを。」など言はすれば、「そのことと候はでは、な

れなれしきさまにやと、つつましう候ふうちに、日ごろは山寺にまかり歩き

てなむいとたよりなく、つれづれに思ひ給うらるれば、御代はりにも見奉

らむぞてなむ。御宮に参りて候ふ。」と語る。「いとよきことにこそあなれ

その宮は、いとあてにけしうおはしますなるは。昔のやうにはえしもあら

など言へば、しかおはしませど、いと氣近くおはしまして、常に参る

や。」と問はせおはしまして、『参り侍り。』と申し候ひつれば、『これ持て参り

て、いかが見給ふとて奉らせよ。』とのたまはせつる。とて、橘の花を取り出

てれば、『昔の人の』と言はれて、『さらば参りなむ。』いかが聞こえさすべ

きと言へば、言葉にて聞こえさせむもかたはらいたくて、何かは、あだあ

だしくもまだ聞こえ給はぬを、はかなきことをも、と思ひて、

薫る香によそふるよりはほととぎす聞かばや同じ声やしたると

と聞こえさせたり。

まだ端におはししけるに、この童、隠れの方に氣色ばみけるけはひを、

御覽じつけて、『いかに。』と問はせ給ふに、御文をさし出でたれば、御覽じて、

同じ枝に鳴きつづをりほととぎす声は変はらぬものと知らず謎門

と書かせ給ひて、賜ふとて、『かかること、ゆめ人に言ふな。すぎがましき

やうなり。』とて、入らせ給ひぬ。

Q1 どういうことか。

A. 初夏は青葉がしずむころで、

Q2 どういうことか。

A. たに遠ざかるて、草観を思ふ

和歌ロツと前後の文章と関係

・分節

・一句づつ訳

・文法・修辞(掛詞など)

・順番をへんてみる。